

## 英国・ロンドン滞在&lt;雑記&gt;

環境都市工学部 建築学科 教授 藤田 勝也

在外研究で、英国・ロンドンを拠点に異国で過ごした、紀行文である、と記したいところである。しかし、前後の順序がまちまちで、紀行文の体など、そもそもなしてはいない。すべては、わずかな期間の限られた行動範囲内で体験し、見聞した事柄をありのまま記しただけで、筆者個人の主観的な感慨の域を出るものではない。したがって、独断と偏見にもとづく、単なる、これは、雑感の記である。

## &lt;ロンドンの医療事情&gt;

冒頭から、病いの話で恐縮である。

ロンドンで生活するためには、万一の病気やけがにそなえ、GPを登録しておくのが必須である。GPとは「家庭医」の制度。風邪の時など、まずはここにかかる。さらに診察が必要とGPが判断すればNHS(国営医療)の病院へ、ということになる。とはいえ、GPの判断はなかなか厳しく、軽い風邪程度でNHSまで行けることはまずないし、急性疾患でも連絡してから診察は4~5日後という。それ以前に、GPに登録できるのは、原則、永住者であって、短期の旅行や留学では、登録そのものができない。短期でもビザさえ取得していけばできる、ともいわれ、そのためもあってビザ取得のうえ渡英した筆者だが、結局、できなかった。

いっぽう救急で搬送されるのはNHSである。これは登録、未登録に関わらない、ということになっている。しかし、未登録者(短期の旅行者)では、それが理由で、診察してもらえない、あるいは後回しにされて何時間も待たされる(救急?)ということが、とくに連立政権が変わってから、まま起きているらしい。

NHSの医療費は低額である。がん治療などに用いられる高価なものも市販の胃薬でも、薬代は一律、数£(ポンド £1=約140円、2010年夏頃)ともいう。親切なこの制度は何をもたらしたか。治療あるいは出産のため海外から多くの人が渡英する。そこで医師の人手が足りず、NHSの機能が低下する。また多人種

国家の通例か、たとえば決められた医療費を平気でねぎる、といった、にわかには想像しがたい人々への対応もある。そこで、永住権をもたない外国人の患者に対して、冷たくなる。もちろん国籍や人種にはかわらない。対応を変えては、差別になるからである。

いっぽうNHSとは別に、プライベート病院というのがある。専門医が在籍し、文字通りプライベートに患者を診察する病院である。病院ではあるが、そのつくりは高級ホテルあるいは、たぶん会員制クラブのごとき趣で(たぶんというのは、筆者はもちろん知らない)、ゆったりと診察を受けることができる。専門医が在籍、と書いたが、日本のように勤務医として病院に所属しているのではない。医師は個人事業主であって、診療行為のために病院内に場所を借りているに過ぎない。受付から診察時間の調整、診察費の請求に至るまで、治療に関わる事務的業務の全般を担うのは、私設の秘書である。

ご賢察のとおり、診療代は、きわめて高額である。むろん内容にもよるが、たとえば日帰りの検査・手術で、約£3500。これに、永住権をもたない外国人にはデポジット(保証金)が£1500程度発生する。しめて約£5000(約70万円、£1=140円で計算)。たった一日である。入院ともなれば、個室一泊£800(約11万2000円)ともいう。相部屋でいいのだが、個室しかない。これらを検査前、手術前に全額支払わなければ、治療そのものが受けられない。当然、患者は、VIP(というか、お金持ち)に限られる。月々高額な保険をかけられる富裕層である。その医師自身が、けがや病気の時は、プライベート病院ではなくNHSで治療を受けているらしい。なんとも奇妙な話である。

プライベート病院の立地は、その性格を反映する。ビートルズで有名なアビーロード。スタジオは今なお現役で、表現は古いが、レコードのジャケット写真のメンバー4人がわたる横断歩道は、スタジオ前である(写真1)。記念撮影に訪れる観光客は絶えないし、ス



写真1 アビーロードは、プライベート病院のひとつセント・ジョン&セント・エリザベス病院のすぐ近く。アビーロード・スタジオは歴史的建造物に指定。横断歩道も、つい最近、指定された。

スタジオの外壁には無数の落書き。高級住宅地の一角である。あるいは、都心の一等地、唄で有名なテムズ川にかかるロンドン・ブリッジのたもと。プライベート病院は、そんなところにある。

NHSとプライベート病院の間があればと、つくづく思う。しかし、そういう病院は、病院関係者によると、ないらしい。だから、日本の方がいいですよ、その病院関係者は付け加えた。

### <ロンドンの銀行とスキミング>

現地の銀行口座がないと、なにかと不便である。たとえば自宅でネットがしたい。そのために固定電話番号が必要である。固定電話を通すためには、BTであれバージン（ケーブル会社）であれ、契約時に銀行口座番号が必要となる。また、普段の買い物はカードである。クレジットカードかデビットカード。即時決済のデビットカードをもつには、やはり銀行口座が必要である。

そこで、口座の開設がしたいと銀行を訪れる。まずは、口座開設担当者に予約書を書いてもらって、後日、再訪することに。

短期の滞在者には、各種証明書が求められる。現住所を証明する書類。手元にある賃貸契約書では駄目である。なぜか。住んでいることの証明には、ならないらしい。電気やガスの請求書をもっていないのかという。渡英後、さあこれから生活しようという時期に、請求書など、あるわけない。

日本の住所の証明も必要という。そこで、受け入れ大学の主任の先生にお願いして、両住所を併記した証明書を書いてもらう。この証明書、A銀行では受理される。しかしB銀行では、学生ならこれでもいいが、社会人では駄目だという。日本の住所を証明するのに、

自動車の国際免許証はどうか。自動車免許証は、日本国内では、ときにID代わりにもなる。しかも「国際」がつく免許証ではないか。しかし、駄目である。B銀行では、その理由が、日本語表記の部分が彼らに読めないからという。これには当然、英語が併記されているが、英語表記の、日本の自動車免許証をもってきなさいという。

さらに、複数の銀行が、短期滞在者には月々の口座維持費を求めてくる。しかもこの金額、銀行によって異なる。さらにそのうえ、最低1年間の口座維持が条件である。また、この口座、B銀行のある支店では、本店国際部でないと扱えない、などと言う。加えて、口座維持費がかからない銀行などロンドンには存在しないとまで、その担当者は、はっきり言い切った。しかし口座維持費がC銀行では発生しないことを、後で知る。ここまできて、銀行によるというより、銀行員の裁量次第であることに気づく。

ともかく、銀行口座は開いた。しかし自宅に電話、ネットはひかなかった。ネットも固定電話も、原則、最低1年以上の契約が条件なのである。しかも、この短期滞在者向けの口座では、小切手帳は持てない、という落ちまでつく。時限付きのかりそめの居住者などに小切手帳を渡しては、不当たりが心配というのが、その理由らしい。

さて、銀行といえば、カード情報が盗まれるスキミング被害は、ロンドンでも例外なく少なくないらしい。前記したように、スーパーストアの買い物にも、レジでの支払いは現金ではなくカードが一般的なカード社会である。しかもICチップ内蔵が、まま求められる。近所のスーパーストアは、ICチップ内蔵でないと、受け付けてもらえない。日常の買い物客相手に、行列をつくるレジ前で、いちいちサインを求めていたのでは、確かに店側も大変ではある。

カード社会は、現金を持ち歩くのはリスクが高い世相の反映でもあるが、しかしこれがスキミングという新たな犯罪を生み出しているらしい。カード社会とはいえ、現金もやはり必要である。そのため街中でATM（キャッシュ・ディスペンサー）を探すのは、比較的容易である。しかしこれが盲点で、カード挿入口にスキミング用の装置がいつのまにか仕掛けられ、カード情報がそっくりそのまま盗まれる。あるいは鞆の中のカードでも、遠隔操作で情報が盗まれるハイテク器もあるという。

それでも、暗証番号さえ漏れなければ、悪用はされないだろうと考えていては、あまい。ATMにカメラ

もセットで外付けされていて盗撮される、あるいは、順番待ちのふりをして、暗証番号を後方から直接盗み見されるということもある。銀行店舗内であれば、スキミングの可能性は、比較的低いらしいが、街頭に設置されたATMは危ないという。意識してみると、こちらの人は、周りから見られないように必ず体や持ち物でキーパネルを隠し、暗証番号は素早く入力している。はたして、画面にもその旨の注意書が、ちゃんと表示される。

スキミングは、被害にあった自覚がないから、不正に預金が引き出されていることに、なかなか気づかない。ネットバンキングでこまめに残高確認でもしていなければ、最後まで引き出されてから、いざ、自分が引き出そうして、残高不足で気づく、といった不幸な目にあう。

大学から最寄りの地下鉄駅近くに大手銀行の支店がある。この支店の外側、歩道に面してATMが設置されているのはたいへん便利で、時に行列ができるほど学生もよく利用している。昼間、歩道を行き交う人波は絶えない。しかし、こんなところにもスキミングの装置が密かに仕掛けられていたらしいのには、やはり驚かされる。

では、こういう被害に遭ったとき、たとえば日本国総領事館は、何か手助けしてくれるのか。何もしてはくれない。あたりまえである。が、一応、報告はこちらからしておく。むこうは記録して、情報がまとまれば、こんな事件がありました、気をつけましょうと、他の在留邦人にメール等でお知らせするのだろう。それだけである。そして、とりあえず、警察に届け出よというアドバイスはある。

とりあえず、というのは、警察が本気の本気で捜索をするかどうかはともかく、被害届けは出しておくべきである、という意味。なぜか。万事が保険で解決の社会では、その書類こそが大事なのである。書類作成は警察でもらう。警察とはそういう役割である。

そこで、被害を所管の警察署に報告すべく、自身で、出向くことになる。長時間の事情聴取を受ける。英国にきた目的は何か、から始まって、根掘り葉掘り聞かれる。被害届けをなぜ出しにきたのか、との質問には、さすがに返答に窮するし、どこでスキミングされたの、かって？そんなことわかっていれば、被害に遭うこともないだろう。ともかくいろいろ尋ねてくる。レファレンス・ナンバーとスタンプを警察からもらって事情聴取は終了。とくにこのレファレンス・ナンバーが重要なのは、スキミングの被害相当額を銀行で保証して

もらうための、証拠資料になるからである。

### <英国の文化財とその保全>

ロンドン中心部への自家用車の乗り入れは、厳しく規制されている。平日、まえて通行料金を支払う必要があるのは、渋滞緩和策の一環である。いっぽう郊外にでかけるのに、道路はよく整備されていて、気持ちがいい。高速道路はごく一部の地域を除いて無料である。最高時速制限は70マイル（約112キロ）。しかしこれでは、追い抜かれる一方になるほど、皆さんよく飛ばす。ホリデーの時季には、キャンピングカーや自家用船を牽引して、疾走する自動車もよく見かける。

イングランドの北、スコットランドは、独自の紙幣をもつように、今なお独立への気概は強い。スコットランド経済の中心地、グラスゴーは、アダム・スミスを輩出したことでも知られる。産業革命を背景に19世紀から20世紀にかけて大きく発展したこの都市を特徴付けるのは、当時の富を象徴する重厚な建築群で、グラスゴーはなにより、建築デザインの街である。

当地が生んだ、世紀末の建築家C.R.マッキントッシュ設計の建築が多く遺り、母校グラスゴー美術学校では、学校スタッフによるガイドツアーで懇切丁寧な解説がきける。産業革命後に興ったアーツ&クラフツ運動を先導したウィリアム・モリスはロンドンだが、その思想をグラスゴーで具現化したのがマッキントッシュである。来日はしなかったが、日本からの影響が多々見られる、いわゆるジャポニズムのマッキントッシュのデザインは、英国のオールヌーヴォーにおいても大きな役割を果たした。そのオールヌーヴォーを明治20年代、はじめて日本の建築家に紹介した満州帰りの前田松韻が、その後、日本住宅史の研究に大きな足跡を残したのは、なにかの巡り合わせであろうか。

グラスゴーから30分ほどドライブすると、広大な南斜面に邸宅が佇む住宅地がある。すぐ近くに鉄道駅、下まで降りると湖畔にショッピング街。まるで阪神間の高級住宅地ではないか。ここに、20世紀初頭、マッキントッシュがグラスゴーの出版社社長のために設計したヒル・ハウスがある（写真2）。陽光ふりそそぐ前庭からの広大な眺めは、英国の風景そのもの。住宅内部は、随所にみられるマッキントッシュのデザインのディテールについて、宝探しの感覚で大人も子供も楽しく学べる工夫がなされている。現在、ナショナルトラストによって保存、公開されていて、たとえば有名なストーンヘンジもその一つであるイングリッシュ・ヘリテージをはじめ、英国には歴史遺産が手厚



写真2 ヒル・ハウス 1904年。グラスゴー近郊のヘレンズバラにたつマッキントッシュ設計の住宅。白を基調にした内部は、ジャポニズムを感じさせる。

く保護され、また公開、活用されるための枠組み、制度が複数あって、各々しっかり機能している。

ナショナルトラストは、歴史的な建造物や土地を開発者から守り、環境を保護する目的で1895年に設けられた慈善団体。したがって、すでに1世紀以上の歴史をもつことになる。わずかな入場料と一般市民からの寄付のみで、政府からの援助を一切受けずにすべての経費を賄っている。全土に広大な土地を所有し、どこからでも40分以内にナショナルトラストの所有地まで到達できる、ともいわれる。現在の会員数は300万人以上、ボランティアは4万人以上、毎年1000万人以上の人々が建物を訪れ、約5000万人が野外の緑地、公園を訪れるという。

日本円にしてわずか6千円程度の初年度年会費で、会員の一人となった筆者は、それらの土地、建物に、どこでも無料で訪問できた。むしろこの年会費も、団体の貴重な収益である。当地では、死後遺される土地、建物、家具をナショナルトラストにゆだねる人は少なくないらしい。古いものを愛し大切にす国民性とともに、団体への揺るぎない信頼感の、これは証に他ならない。写真3はナショナルトラストが1896年、はじめて購入した、ロンドンの南部、サセックス州にあるアリフリストンの牧師の住居である。田舎の村の教会と墓地、前の広場は憩いの空間で、この茅葺きの古民家が広場の一郭に佇む風景は、なんとも言いようなく、美しい。

オックスフォード近く、チャーチルゆかりのブレナム宮殿は世界遺産だが、TDLかUSJのごとき仕掛けが宮殿内部に設けられ、楽しみながら宮殿にまつわる歴史が学べる(写真4)。また、いわゆる歴史遺産ではないが、イングランド北部の古都ヨークのヨービック・ヴァイキング・センターでは、入館者は、なんと

一歩も歩くことなく、乗り物によって探検気分バイキングの文化と歴史を五感で体験できる。しかもそれら再現物が、つくりもの、単なる想像によるものではなく、これまでの地道な発掘調査にもとづく精緻な実証によって復元された、学術的な成果なのである。

歴史や文化を大切にすお国柄は、ロンドンの街中で、本屋を少し覗けば、すぐにわかる。新刊大手のホリーズでもウォーターストーンズでも、歴史や芸術、文化のコーナーが店内に占める面積は、日本の本屋の比ではない。また、ロンドンには多くの博物館、美術館があるが、大英博物館でもナショナルギャラリーでもヴィクトリア&アルバートミュージアムでも、展示・公開される膨大な文化遺産、芸術作品を、常に寄付制、つまり無料で公開している。

パリのルーブルもオルセーも、フィレンツェのウフィツィも、もちろん素晴らしい。しかし有料だから、チケット購入のための長い行列にならぶことから、まずはじまる。そのあと入場口で、また、ならぶ。モナリザやヴィーナスの誕生までの道のりは、遙か遠いのである。しかし無料だと、ならぶべきチケット売り



写真3 アリフリストン(サセックス州)の牧師の住居。茅葺きで木組みをみせる外観。



写真4 世界遺産のブレナム宮殿。広大な庭園があり、その一郭にメイズ(迷路)もある。宮殿建物とメイズの庭園を結ぶミニ鉄道は、英国らしく本格的。

場も入場口も当然、不要。ゴッホのひまわりもレオナルド・ダ・ヴィンチの岩窟の聖母マリアもエジプトのミイラも、たとえばトイレを拝借する(これも無料)、ちょっとついでに寄り道して観てから帰ることだってできる。ショッピング好きの筆者は、そのたびに何かしら買ってしまっていたが。

### ＜イタリアへ＞

西欧の主要都市では、どこでもそうだが、関西から地方への小旅行のごとき感覚で、周辺諸国を訪問できるのが、ロンドンに住んで便利なことの一つである。

20数年ぶりに訪れた7月のイタリア・ローマは、以前とは比較にならないほど、観光客で溢れていた。その日は地下鉄のストライキと重なったこともあって、道路は大渋滞。路線バスが、運転手の裁量で、渋滞する道を避けて迂回して走っているのは、もはや「路線」バスとも言えないが、はからずも車窓観光できたのは、なんだか得したような気分ではある。パチカンのサン・ピエトロ大聖堂は夕刻とはいえ、多くの人々で賑わっていた。いうまでもなくカトリックの大本山、聖

地なのだが、観光地化が一層進んでいたのは気のせいではない(写真5)。中央ドーム上部への昇降はおろか、内陣近くにも近づけなかったのは、宗教空間としての静寂の保持が困難になりつつあるからだろうか。ピ・サイレントというアナウンスが何度となく、むなしく、響き渡っていた。

サン・ピエトロ大聖堂のような16世紀イタリア・ルネサンス建築の傑作があるいっぽうで、古代ローマ時代の建築が今なお現存し、徒歩でも容易にまわれるのがローマである。その一つ、古代ローマ時代の神殿、パンテオンは、ドームによる巨大な内部空間をもつ。直径43メートルを超える球体が内接する規模のドームの構造が、サン・ピエトロ大聖堂のそれと近似するのも興味深い。ここでは、中央にすっぽり開けられた直径9メートルの天窓の存在感が際立つ。しかし、内部は多くの人々の群れ(写真6)。宗教空間における公開性について、あらためて考えさせられる、人混みのローマである。

夏季のハイシーズンのためか、イタリアの主要な観光都市、フィレンツェもヴェネツィアも、多くの観光



写真5 サン・ピエトロ大聖堂(ローマ)。多くの観光客で賑わう堂内。



写真6 パンテオン 古代ローマ時代の神殿。巨大なドームの空間に圧倒される。多くの観光客にも。



写真7 フィレンツェのドーム。街の観光名所は、どこも長蛇の列。



写真8 ヴェネツィアは水の都。ヴェネツィア・ゴシックの傑作、カ・ドーロ(黄金の家)のすぐ近くの路上。夕刻。

客で賑わっていた(写真7、写真8)。フィレンツェは花の都で、景観の美しさは以前となんら変わらない。いっぱいヴェネツィアは、水上を走るヴァポレットが路線バス代わりで、ここから眺める水上景観は訪れる人々を惹きつけてやまない。ヴェネツィアのような海陸一体の親水空間を大規模にもつ街が、世界的にも希少であるからこそ、多くの観光客を集めるのだろう。小京都は日本国内の呼び名だが、世界各地の小京都ならぬリトル・ベニス、本家ヴェネツィアへの強い憧憬の産物である(写真9、10)。しかしいっぱい、この旧市街地を少し離れた一角に、ここは日本?と見紛う風景があるのは、なんとも不思議である(写真11)。

人混みを避けるなら、イタリアはもっと地方の都市がいい。ヴィチエンツァはマニエリスムの建築家アンドレア・パラディオでよく知られる街である(写真12)。パラディオが遺した建築を身近に数多く楽しめるこの街は、ヴェネツィアから鉄道で約1時間。パラディオの代表作であり、後世、多大の影響を与えたヴィラ・ロトンダは、さらに駅前からバスで20分ほ

どの小高い丘の上につ。内部見学できるのは毎週水曜、しかも午前・午後の限られた時間帯のみ。これを一目見ようと時間前から門扉の前に世界中からそわそわと集まる人々は、筆者と同じ建築好きの、同好の士であること、間違いない(写真13)。

ヴィラ・ロトンダが左右対称、前後対称のシンメトリカルなプランをもつのは、手元に図集や写真さえあれば、すぐにわかる。しかし、建築とその周囲との関係は決してシンメトリカルではない。これは現地を訪れ、実見してこそ、はじめて実感できる。パラディオのほんとうの意図は、実はそこにあったのではないか、などという思いは巡り、興味はつきない。名作といわれるゆえんであろう。

このヴィラは、時代をこえ、国境をこえて、多くの建築家に大きな影響を及ぼした。地元ロンドン郊外にも、そのコピー版ともいべきパラディアンイズムの建築がある。チズウィック・ハウスはその一つで(写真14)、イングリッシュ・ヘリテージが保存・公開している。周囲に広大な緑地をもち、近隣に憩いの場を提

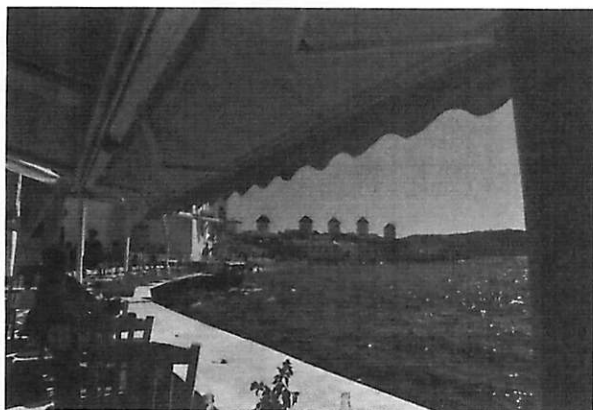


写真9 ギリシャ・ミコノス島のリトル・ベニス。むこうに風車がみえる。ここの、あるレストランの海鮮パスタは、とにかく絶品。



写真10 ロンドンの街中にもリトル・ベニスはある。パディントン駅のすぐ北方の住宅地。ここからリージェンツ・パークの北辺を経て動物園を横切り、カムデンタウンまで、運河をボートで遊覧できる。

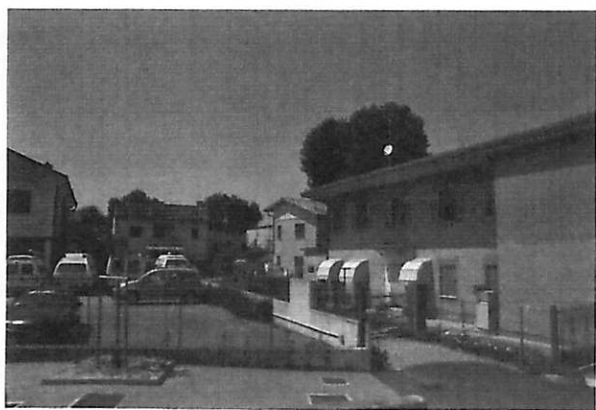


写真11 ヴェネツィアの街中。昼下がり。



写真12 ヴイツエンツァの街並み。パラディオ建築美術館のごとき趣。

供しているのは、各地に遺るステイトリー・ハウス(貴族の大邸宅)に共通してみられるところで、英国の歴史が生んだ、これもかけがえのない地域の財産である。

さて、駅前からヴィラ・ロトンダ方面へ向かうバスの本数は少ない。帰路も同じである。しかもダイヤ通りに運行されているはずもないことは、容易に想像がつく。

駅まで歩こうか、とも思う。しかし炎天下、とにかく暑い。運良く、まったく予想外に、バスがきた。で、乗り込む。最寄りのバス停に切符売り場などなかったし、近くに売店らしき店舗など、一軒も見当たらなかった。しかし往路の際、駅中の売店で切符は往復で買ってある。だから何ら問題はない。バスの車内で刻印機に切符を通して刻印しておく。バスが駅前に近づくと、車掌か運転手らしき制服の数人がバスに近づいてきた。交替要員かと思ったがそうではなく、バスから降車する乗客をすばやく包囲するや、切符を見せろという。ここで切符が無いと、もちろん罰金である。かれら検札係からは、もちろん、グラツィエと言われ、その場を立ち去る。やれやれ切符は往復で買って置いて良かった、と思う瞬間である。イタリアのバスや鉄道では、正規の切符の売り上げより、この罰金による収益の方が大きいともいう。

主要都市間を便利に結ぶのが、その鉄道である。鉄道では、切符を乗車前にホームや改札に設置されている刻印機(これが、よく故障していたりするのだが)に通しておかないと、車内検札で罰金を支払うはめになる。

フィレンツェから特急で1時間足らずのピサへ向かう車内で、急いで乗車したため、不覚にもその刻印を忘れてしまったことに、発車してから気づいた。検札係がすぐ前まで近づいてきていたので、仕方ない、罰金か、と覚悟を決めたが、直前で、最初の停車駅となったため、どこの駅か、わけもわからず、とにかく飛び降りた。

ところが、この駅が無人駅。しかも、たった一台だけの切符の自販機が故障中である。後からアメリカ人らしきグループがやってきて、自販機に挑むが、やはり無理らしい。一緒に途方に暮れていると、そこにたまたま通りかかった若い女性が地元らしく、近くの商店に行けば切符は買えることを、とても丁寧な教えてくれる。グループの数人とともに、その店まで走って、無事購入し、いったんフィレンツェまで戻ることにした。

やがて列車がきて、席に座って一息ついていると、



写真13 ヴィラ・ロトンダ。門扉前で開場を待つ。このあとも、ぞくぞくと建築マニアがあらわれる。

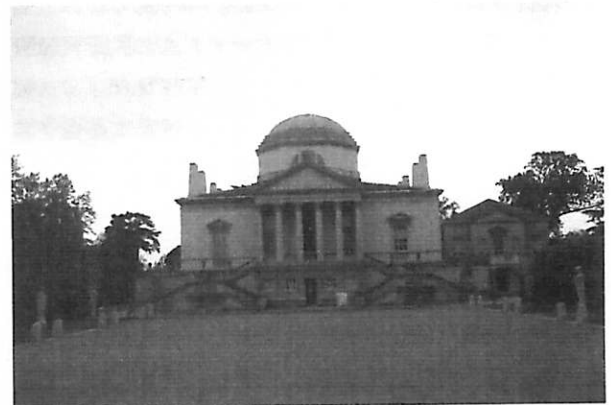


写真14 チズウィック・ハウス。自宅から車で10分程度。ミニ・ロトンダ、といったところ。実はこれを見て、本家ヴィラ・ロトンダ(写真13)へ行くようになった。

先ほどの女性ともう一人、連れの女性がやってきて、小さな紙片を差し出す。イタリア語に英語の対訳付きである。幼子3人をかかえ、生活に困っています、どうか助けて下さい云々と、わざわざワープロで記してある。彼女らもフィレンツェで降りたのだが、どうやらこの路線、ほぼこの区間で「活動」しているらしい。

#### <フランスへ>

フランス・ロワール川流域は、多くの古城が遺る美しい地方である(写真15)。イタリア・フィレンツェ近郊の出身であるレオナルド・ダ・ヴィンチが晩年過ごした住宅は、そんな片田舎にある(写真16)。

レオナルドは多くの分野で才能を発揮した天才である。画家としての修業時代、師匠のヴェロッキオは、レオナルドの絵を見て、この弟子にはかなわないと、以後、絵筆を擱いたという。ミラノ大聖堂の私案やフランス・シャンボール城館の二重螺旋階段(写真17)などを手がけた、建築家でもあった。この自宅では、レオナルドの発明家としての天才ぶりが、彼が考案し

た具体的なモノを通してうかがえる。自転車から運河に至るまで、その範囲はたしかに常人の域を超える。しかし、なにより目をひくモノは、ほかにある。

俗世のしがらみをもっとも嫌う真の芸術家であったレオナルドにとって、多くの芸術家のパトロンであったメディチ家をもっとも忌避すべき存在であった。なぜ、芸術家がメディチ家などに頭を下げる必要があるのか。優れた芸術は無条件に評価されて当然である。しかし、財力、政治力でかなうはずもない。そこでミラノ公にメディチ家打倒を依頼する。そのためにレオナルドが考案したのが、戦争のための殺戮兵器の数々。360度方向に発射できる砲弾を積んだ、人力による戦車の仕組みなど、まるでアニメの世界である。1999年に人類は滅亡するというノストラダムスの大予言は、フランス王妃となったカトリーヌ・ド・メディシスに対するものともいわれ、彼女の求めに応じて侍医ノストラダムスが処方したという毒薬の薬棚なども展示されていて楽しめる。

ロワール地方まで行かなくても、パリから少しばかり離れただけで、美しい景観に出会うことはできる。たとえばパリ・モンパルナス駅から約1時間の地方都



写真15 ロワール河流域の街。



写真17 シャンボール城館の二重螺旋階段

市シャルトルは、大聖堂の街である(写真18)。本場フランスのゴシック建築を代表する大聖堂は壮大で、内部のステンドグラスは華麗で神秘的、シャルトル・ブルーはよく知られている。内外とも見ていて飽きることがない。世界遺産でもあり、この大聖堂を目当てに訪れる観光客は少なくない。すぐ近くに観光案内所があって、街歩きのための地図がもらえる。日没頃からは大聖堂はじめ街中がライトアップされる。このように観光に力を入れる街だが、大聖堂周辺にいわゆる観光地の喧噪はなく、街は落ち着いた佇まいである。大聖堂は街の象徴。だから街のどこからでも、よく見える。大聖堂を中心とする旧市街地は東方のウール川沿いの一画をはじめ景観がよく保全修復され、中世の面影を色濃く遺す(写真19)。フランスも地方の古い街が、やはりいい。つぎの来訪でも、人影まばらなこの光景のままであってほしいと思う。

#### <ロンドンの英国人>

さて、ロンドンでは、庭付きの一戸建て住宅を、デタッチドハウスという(写真20)。頭にセミを付けて、セミ・デタッチドハウスは、一軒を中央で二分割して



写真16 レオナルド・ダ・ヴィンチが晩年過ごした家。まさか、中に殺戮兵器の展示があるとは・・・

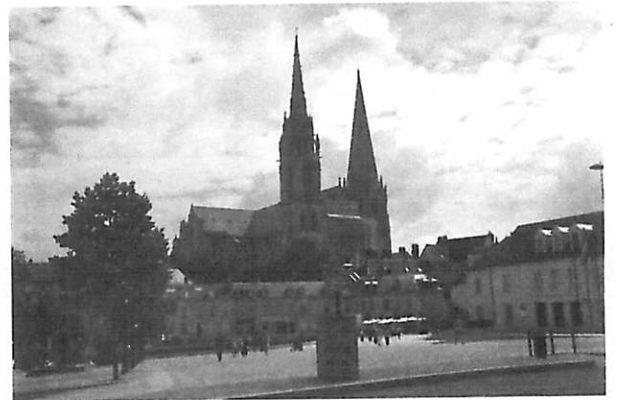


写真18 シャルトル大聖堂。フランス・ゴシックの傑作の一つ。



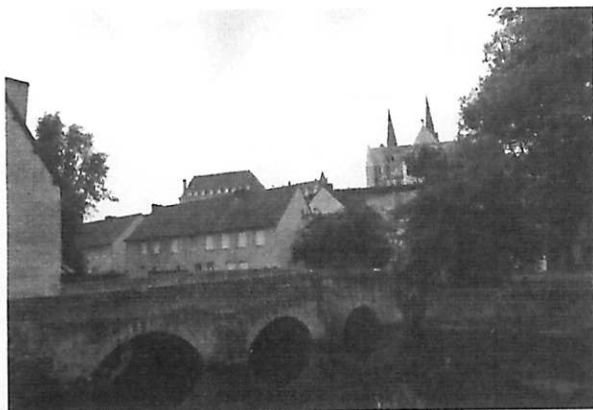


写真19 シャルトルの街並み。どこからでも大聖堂はよく見えます。

二住戸としたもの。外観はもとより周囲の庭もきっちり二分割されている(写真21)。家探しの時、不動産屋に、それでは隣が気にならないかと尋ねたら、隣を気にするのは日本人だけです、と言われた。いい意味での個人主義かとも、そのときは思ったものだが、何のことはない、彼らは結構まわりを見ている。気にしないふりをしているだけである。

ロンドンには地下鉄(アンダーグラウンド、愛称チューブ)が縦横無尽に走る。1863年運用開始された世界最古の地下鉄で、多くの路線が地下を幾層にも交差し、地下通路は迷路のごとき趣である。駅構内の上下移動にエスカレーターやリフト(エレベーター)は欠かせないが、もちろん階段がある。その表示マークからわかる車椅子対応の駅の数が多いとは言えず、ほとんどの駅では、ホームと地上の往復に、あるいはライン間の乗り換えに、階段が待ち受ける。



写真20 ロンドン、ハムステッド・ガーデン・サバープのデタッチド・ハウス。ハムステッドはロンドン北部の都市内住宅地で、いまま緑豊かな景観を保つ。

建築的なバリアフリーの観点からすれば、これではまったく欠陥、時代遅れということになろう。健常者ならともかく、高齢者やベビーバギーの子連れ、車椅子の人たちは困るではないか。健常者でも、重いスーツケースを何個もかかえての、階段の上下移動は、やはり、たいへんである。バリアフリー後進国か。早く実態を把握して、バリアフリーの整備、充実を。技術もノウハウもあるのだから。そのためにまずは専門家による学術調査から、ということになるのだろう。おそらく日本では。

そういうことでないのは、すぐにわかる。重いスーツケースやベビーカーをかかえ、階段前で立ち止まった人には、周囲の誰かが素早く手助けに必ずはいる。通勤時間帯で忙しいはずのビジネスマンが、である。困っていれば助ける。まったく無関係の他人の重い荷物をもって階段を上下する。これが普通の光景である。

エスカレーターの途中で気分が悪くなったのか、倒れた高齢者。気づいた後方の女性から思わず悲鳴があがる。その瞬間、同じエスカレーターながら、かなり離れたところの2~3人が走って駆け寄る。なんと反対向きのエスカレーターからも、数人が手すりを飛び越えて駆けつける。一人は非常用ボタンを押してエスカレーターを緊急停止させる。その間、わずか数秒。映画のロケではない。緊急非常時の訓練をしているのでもない。たまたま居合わせた、単なる通行人である。しかし、これが普通の光景である。

段差をなくす、リフトを増やす、手すりを設けるのも確かにバリアフリーではある。しかし、心のバリアフリーは、この国が、間違いなく、先進国である。



写真21 セミ・デタッチドハウス。いわゆる二戸一の住宅。むかって左側の住戸を大幅に改装中。半年たっても、まだ工事は終わっていません。

だから、彼らは周りを気にしていない、のではない。気にしないふりをしているだけである。人混みで体が思わず接触してしまった時、狭い隙間をぬって前に進みたい時、必ず一言、ソーリーという。列にならなくて横入りはしない。それどころか、まず立ち止まって、相手の動向をうかがってから進む。そして一言、ソーリーである。

ロンドンでは、交差点の赤信号は、歩行者にとっては単なる目安にすぎない。自動車がやっこないと思えば、たとえ近づいていても横断できると思えば、赤信号でも歩行者は、普通に横断する。むろん危険ではある。そこで、自動車が向かってくる方向には、路面に注意喚起の表示がある(写真22)。両方向とも危ない所では別途、標識があったりもする(写真23)。ドライバーの方は百も承知で、交差点を蕩走することは、まずない。よく知られているように、住宅地内の道路などには必ずバンプ(こぶ)があり、蕩走のしようがない。道路も、そういうつくりになっている。

ともかく、ドライバーにとって信号がたとえ青でも、歩行者がわたってくることは、あらかじめわかっているから、交差点では徐行する。それどころか、歩行者にとっては赤信号であっても、歩行者がもしれば、自動車は、まま停止し、歩行者に横断をうながす。歩行者、すなわち弱者がつねに優先である。

信号機の指示は規則である。規則は守るべきもの。しかし彼らは規則に縛られることは、決してない。ほんとうに大切なのは規則ではなく、弱者が優先され守られること。それが彼らの意識に徹底している。心のバリアフリーにも通じる。だから、英国人は、しっか

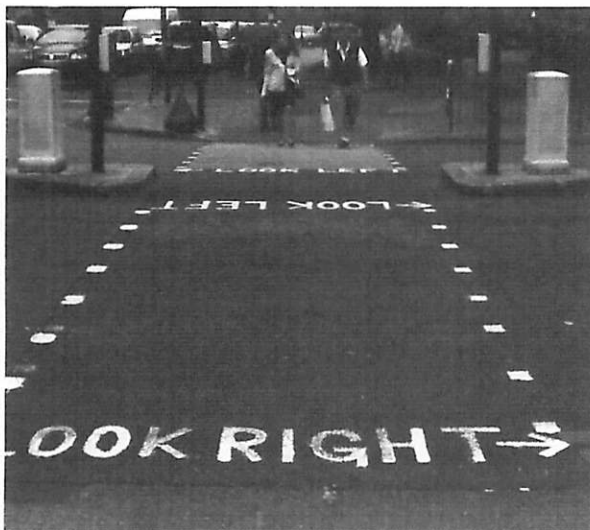


写真22 横断歩道に、注意喚起。よく見られます。



写真23 歩行者へ。両方向に注意しないといけない場合。

り周りを見ている。気にしていないふりをしているだけである。気にしないふりをしているのも、あるいは、彼らの周りへの気遣いではないか、とさえ思ってしまう。

2010年は、平均最高気温がこの113年間でもっとも高く、記録的な猛暑であったという日本とは対照的に、当地の今夏8月の平均気温は1993年以来、ここ17年間で最低だったらしい。7月の比較的暑い日に、少しでも晴れた日があれば日光浴を楽しむロンドンの人々を、これから8月の本格的な夏になればもっと暑くなるだろうにと、思ったのはまったくの見当違いで、8月は気がつけばすでに秋風。猛暑の夏とは無縁の今夏であった。穏やかな気候と諸々のしがらみからの解放感、在外研究が筆者にもたらした僥倖である。

次のオリンピック2012年はロンドンだが、在籍した大学の研究部門では、4年に一度、1年間の在外研究が教員に与えられ、自身の研究を振り返り、深化させ、視野を広げ、さらに心身ともに充電するための、絶好の機会になるのだそう。今回は、調査研究の6ヶ月間という、ごく短期とはいえ、それでも多くのものをえられたと思う。関係各位にあらためて深く感謝したい。

(2010年12月30日 記)